

第3 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

本部会が問題作成に当たって基本方針としたのは、これまでどおり、「高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定する」という大学入試センターの目的、及び「良識ある公民として必要な能力と態度を育てる」という高等学校学習指導要領における「倫理」の目標の二つである。これらに留意しつつ、高等学校で得られた基礎的知識を踏まえて、人間としての在り方、生き方、さらには、現代に生きる人間の倫理的課題等について深く考えさせる問題の作成に努めた。

各大問には、学術的な深みがあり、現代的なメッセージ性に富むリード文を置いた。読み応えのある文章の作成を目指すとともに、大問の一つでは対話形式のリード文にすることにより、受験者に身近で現実的な内容となるよう努力した。

設問形式は、従来の五つの大問から、四つの大問とすることにした。すなわち「現代の倫理」と「青年期の課題」を一つの大問とし、より統合的な構成にした。このところ、他の公民科目、さらには地理歴史科目と比べて、平均点が目立って高いことが懸念事項であった。難問・奇問になることなく、また従来の理解力、思考力、応用力重視の姿勢を崩すことなく、ほどよい難易度の良問の作成にこれまで以上に心掛けた。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 国際化が急速に進んでいる今日、その中で日本が、そしてそこに住む個人々が果たす役割はますます重要となっている。それに対していかに貢献できるかを考えることは、青年期の在り方・生き方と密接に関わるものである。また、こうした点に向き合うことは、問題を他人事としてではなく、身近なものとして捉える上で大切であると考え。こうした観点から、地球規模で広がる「貧困」の問題を取り上げた。そして、貧困問題に対する支援の仕方をお金のレベル、技術のレベルと人のレベルにおいて、「責任」の観点から問うことを通して、考えさせることを目指した。責任は、個人々の主体的な関わり方をより自覚的に問うものといえるものだからである。

問1 貧困問題に関連して、センの「潜在能力」についての基礎的な知識を問うものであった。

問2 大人への移行期の発達段階は時代によりその捉え方が大きく変化することが分かっているが、この発達段階の変化に関する理解度を問うた。

問3 地球規模の問題となっている貧困問題に関連して、豊かな国の人々のなすべき義務を一人の思想家の例を基に考えさせるものであった。ピーター・シンガーは、教科書で取り上げられていないため、彼の基本的な考え方を読み取らせる工夫をした。

問4 責任にも様々な種類があることを考えさせるものであった。自分の役割や能力に基づく責任、自分の行為の結果に対する責任の区別は、重要なものだと考えた。

問5 世界の資産の所有状況を表す図を読み取らせること通して、地球規模で極端な偏りを示している貧困格差の問題を考えさせることを意図した。

- 問6 技術支援を行う場合、考慮すべき問題の一つである自然環境への影響を考えさせる問題であった。
- 問7 異文化を体験しても、受け取り側の認知発達のレベルによって、その受け取り方は大きく異なることを図の読み取りを通して認識してもらうことを意図した。
- 問8 異なる文化の理解に関わる様々な見解について、その基礎的な知識を問う問題であった。
- 問9 責任について説いている様々な思想家に関する理解を問うものであった。
- 問10 近年、使用頻度が高まっている「大人への自立」に関連する知識の確かさを問うた。いずれも青年期の発達にも関わる概念であり、知識として正確に理解されているかを問うた。
- 問11 支援においても持続性や相互理解が重要となるという、二人の会話の内容を理解しているかを問うものであった。
- 第2問 本問は、食べる営みの意義を改めて検討することを企図した。具体的にギリシア哲学、キリスト教、インド思想、中国思想、イスラーム思想において、どのように食事が認識されているかを概観するとともに、人とのつながりの中で食事が成立していることを指摘し、食事の掛け替えのなさについて再考することを目指した。
- 問1 エロースのキーワードから『饗宴』の著者であるプラトンを問うた。
- 問2 仏教徒の生活規則をはじめとする戒律についての知識を問うた。
- 問3 他の諸子百家の思想と比較しながら、孔子の礼に対する考え方を問うた。
- 問4 神道、ユダヤ教、ヒンドゥー教、イスラーム教それぞれに特有の神概念を問うた。
- 問5 古代中国の思想家の自然観を問うた。
- 問6 イエスの隣人愛や律法に対する思想を問うた。
- 問7 クルアーンを読ませた上で、イスラームの知識を踏まえて、クルアーンの成立について、またクルアーンの内容について理解度を問うた。
- 問8 ストア派、プラトン、プロタゴラスの思想を対比するかたちで、アリストテレスのポリスに対する考え方を問うた。
- 問9 リード文の趣旨を問い、源流思想から食べる営みの意義を導き出す力を問うた。
- 第3問 様々な書物を介して外来思想と向き合うことで、自らの課題を解決しようとした先人たちの、古代から近代に至る様々な思索の歩みをたどる。そして、異なるものとの出会いによって生まれる新たな価値観の意義に気付かせ、未来へ向けての可能性を考える導きとすることが、本問の出題意図である。
- 問1 古代日本における、仏教と儒教の受容の在り方について基本的な知識を問うた。
- 問2 最澄と空海の思想と、両者の違いについての正確な理解を問うた。
- 問3 鎌倉期の僧侶による、師の言葉を^{へんさん}編纂した書物について、正確な理解を問うた。
- 問4 近世の儒学者が影響を受けた思想と、その儒学者の独自の思想について、基本的な知識を問うた。
- 問5 伊藤仁斎の著作について、基本的な知識を問うた。
- 問6 荻生徂徠の古文辞学と彼の思想について、その正確な理解を問うた。

問7 福澤諭吉が『西洋事情 二編』で「通義」（権利）について論じた文を資料として読ませて、彼の西洋思想受容に関する正確な理解を問うた。

問8 明治のキリスト者がどのようにキリスト教を受容したかについて、正確な理解を問うた。

問9 リード文についての読解力、思考力を問うことを通じて、先人たちが外来の書物に書かれた思想と向き合い、自らの課題を乗り越えようとした思索の諸相について理解を深めさせる。

第4問 自由であることの困難さ、そこに内在する矛盾や葛藤を、社会における法と個人の関係という観点から述べ、西洋近代の思想家がその問題にどう取り組み、どのような解答を示してきたのかを概観した。受験者には、自分の欲することができるかどうかという関心から更に進んで、自由とは法や制度の整備を通じて社会全体として実現を目指すべきものであることに気付かせ、それに加えて、自分自身のそして社会全体の自由の在り方の、絶えざる吟味が必要なのだと理解させることを企図した。

問1 マキャヴェリの政治的権力に関する思想内容について基本的知識を問うた。

問2 自然権ないし自然法に関する西洋近代の思想について基本的理解を問うた。

問3 アダム・スミスが道徳の原理とみなした共感について基本的理解を問うた。

問4 個人の意志に関する西洋近代の思想について基本的理解を問うた。

問5 永遠平和に関するカントの思想について基本的知識を、道徳思想との関連において問うた。

問6 社会の変化と個人の関係に関する思想について基本的理解を問うた。

問7 『自由からの逃走』で展開されたフロムの思想について基本的理解を問うた。

問8 資料（『実存主義とは何か』）を読ませ、そこから読み取ることのできるサルトルの「自由」についての考え方を問うた。

問9 社会における法と個人の関係という観点から述べたリード文の趣旨を、理解できているかどうかを問うた。

3 出題に対する反響・意見についての見解

今年度は、五つの大問から四つの大問へと出題形式を変更したが、高等学校教科担当教員からは、「全体的にバランス良く出題されて」との評価をいただいた。また作成部会が毎年、力を傾注しているリード文についても、良い評価をいただいた。一部、不十分な点もあるとの指摘もあったが、質の高いリード文を置き、それに関連付けて、「倫理」の教科内容に即した適切な設問を過不足なく配置するのは骨の折れる作業ではあるけれども、今後とも努力を重ねていきたい。設問に配された資料文についても、適切であるとの判定をいただいた。出題形式を変更したことによる戸惑いが受験者にあったようだが、種々の事情を慎重に検討した上での変更であり、御理解いただきたい。

本試験と同様、追・再試験においても平均点が下がったはずである。これには、「倫理、政治・経済」の導入による受験者層の変化の影響もあったかもしれないが、やはり難易度が高まったのが大きな原因と考えられる。難易度が無理なく高まったかが問われなければならない。全国公民科・

社会科研究会からは、「いわゆる難問・奇問とされる問題は見られず、高校生が高等学校での学習において身に付けた知識と培った思考力や判断力に基づき、ここで示された問題を考え解いていくと正答に至ることができるように工夫されている」との評価をいただき、作成部会の努力は報われたと言える。その上でしかし、指摘にもあるように、知識重視になってはいないか、十分に注意を払っていく必要がある。

基礎的知識を前提にしつつ、理解力、思考力、応用力を重視するというこれまでの姿勢を維持していくことに今後とも心掛けたい。

第1問 リード文については、「国際協力や国際協調について考えさせることをとおして、そこには様々な問題のあることに気付かせている」、「高校生が取り組みやすいよう工夫されている」という評価をいただいた。その一方で、「センター試験直前にアルジェリア人質事件が起こった。国際協力や国際協調を考えるには、同時に国際平和を求めていくことの大切さが浮き彫りになったこの悲しい事件に直面した受験者には、リード文後半の会話部分が空疎に感じられたことは否めないのではないか」という指摘を受けた。国際平和を求めていくことの大切さは同感である。もともと、このリード文は国際平和の問題を取り入れていたものであったが、練り上げの過程でなくなった経緯もあり、今後は、出題者として、こうした問題をも考慮していく必要があると考える。

問1 貧困問題の解決との関連で、センの「潜在能力」の基本的知識を問うたものであったが、出題者も、御指摘にあるように、「平易な設問」であったと受け止めている。

問2 大人への移行期の発達段階は時代によりその捉え方が大きく変化することが分かっているが、この発達段階の変化に関する理解度を問うた。ハヴィガーストやエリクソンの発達理論の知識を応用して、青年期という発達段階を捉え直してもらうことを目指した。選択肢が出題意図に沿うよう工夫していきたい。

問3 「ピーター・シンガーの主張を日常生活の具体的事象で問う良問である」という評価をいただいた。ご指摘のように、支援の仕方を身近なところから考えさせる意図があった。

問4 「思考力を問う良問だ」という評価をいただいた。選択肢をできるだけ具体的なものにして、単なる知識の問題にしない工夫をした。

問5 「図2の地域別人口比を組み合わせた点に工夫がみられる」という評価をいただいた。出題者も、「世界の資産の所有状況の偏り」と「地域の偏り」とは密接に関係しているので、受験者にこの点も読み取ってほしいと考えていた。なお、『日本・韓国等』の『等』にはどこが含まれているのか、「棒グラフが見えにくい」という指摘を受けた。前者については、「台湾」が含まれていて微妙な問題なので、あえて「等」というかたちにした。後者については、更なる工夫が必要と考える。

問6 酸性雨の原因物質及び世代間倫理の「両方を理解していなければ解けない形式にすることで、限られた出題数で多くの知識を問えるようにしている」という評価をいただいた。出題者もできるだけ単純にならないよう工夫した。

問7 異文化を体験しても、受け取り側の認知発達のレベルによって、その受け取り方は大きく異なることを図の読み取りを通して認識してもらうことを意図した。青年期の様々な問題を捉えるときには認知発達の問題を理解しておくことが重要であることを理解してもらいた

かった。第1問の各設問の設定に当たって、結果的にグラフ読み取りが二つになったが、一つに留めるべきか否かは今後の課題としたい。

問8 「文化相対主義、オリエンタリズム、カウンターカルチャー、エスノセントリズム（自民族中心主義）の基礎的・基本的概念を問う」平易な設問という御指摘のとおりである。したがって、難易度も標準的なものになったと思われる。

問9 シュヴァイツァー、ラッセル及びキルケゴールの責任に関する思想を問うものであったが、「近年、ラッセルは教科書から消えつつあり、出題が適切かどうか意見が分かれる」という指摘を受けた。この点は、上記の「国際平和を求めていくことの大切さ」にも関連するが、出題者としては、国際平和に反した核実験の強行も憂慮すべきものと受け止めている。こうした例も勘案して、ラッセル等の考えももっと倫理の教科書で取り上げてもいいのではないかと考える。こうしたメッセージも含めて、無論、意見の分かれる点も踏まえて、今後の課題としたい。

問10 近年、使用頻度が高まっている「大人への自立」に関連する知識の確かさを問うた。いずれも現代思想や青年期の発達を理解する上での基本的概念であり、正確な知識をもってもらうことを意図したが、その意図を間接的に示すことができたものと思う。

問11 「貧困問題について嘆くGに、Vが語るコミュニケーションが更なる一歩として必要であることを印象付けさせる問いとなっており、良問」であるという評価をいただいた。その一方で、「リード文後半の会話がやや平易で、やや理想的なまとめの内容になってしまっただろうか」という指摘も受けた。後者については、出題者ももっと工夫する必要があると感じている。この点は今後の課題としたい。

第2問 ふだん、私たちはなにげなく食事を摂っているし、また食べるのが当然だと思っているくらいがあるが、食べることの意義、そして食べられることに対する感謝について、先哲や宗教の考え方から再考を促そうというのが本題の目的であった。その意味で、「『食べるという行為』の見直しを願っているようなメッセージ性に富む」と評価していただいたことに感謝したい。また「孤食」やホームレスへの炊き出しについても、念頭においてリード文を作成したので、その点を認めていただいた。ただし、設問についてはもう少し難易度を上げるべきであったかもしれない。

問1 『饗宴』という書名をあげて、その著者であるプラトンを答えさえるという形式であったため、安直すぎるという批判があった。指摘された点について、もう少し工夫すべきであったかもしれない。

問2 仏教の「戒」が余り出題されていないため、その点が評価されたことは有り難い。また、誤答選択肢の誤りの部分を訂正すれば、日頃の学習教材として役立つとの意見もいただき、胸をなでおろしている。

問3 リード文とのつながりが見られないとの指摘があったが、出題者としては、食事に関する礼が他者への思いやりの表れであるのと同時に、その礼の実践が社会秩序につながることにまで射程を置いたつもりであった。

問4 選択肢の誤りが明らかで平易であるとの指摘を受けたが、「誤肢も正せばそれぞれの宗教の神についての特徴を押さえた良い選択肢となっており、高校生の学習への配慮が表れて

いる」との評価をうけた。そういつていただけると、ありがたい。

問5 鄒衍について、「学習させたい意図があるならば別だが」と、出題意図についての批判を受けたが、中国をはじめ日本にも強い影響力を持つ陰陽観念にもとづく自然観を議論する上で、鄒衍は重要であると考ええる。そのつもりの出題であった。教科書記述も少ないため、もう少しスポットを当ててもらいたいとの意図もある。そうした点を御理解いただければ幸いである。

問6 「よく練られている」、「非常に興味深い内容である」との評価をいただいた反面、「微妙な表現と解釈の問題」との批判をいただいた。教科書記述の範囲内で解答を導くことができるよう配慮したが、もう少し工夫すべきであったかもしれない。

問7 受験者にはなじみが薄いと思われる聖典クルアーンを引用し、イスラーム教への理解を深める意図があったが、「『クルアーン』に親しみを覚えるような、良い資料文が引用されている」、「リード文のテーマに即しており、適切な良問」、「秀逸」といった評価をいただき、安堵している。ただ一方で、「それぞれの選択肢の前半を読んだだけで③④が消えてしまうため、資料文Bを全く読むことなく解けてしまい、せっかくの資料文Bが生かされていない」、「残念」との御指摘もいただいた。誤答選択肢の誤答性を明確にすべく、設問の修正を進めていった結果、選択肢における正解と誤答の差が明確になりすぎてしまったかもしれない。正答以外の選択肢について、もう少し受験者に考えさせるような工夫の余地があったかと思われる。

問8 アリストテレスに関する設問で、平易であるとの指摘を受けたが、「確実に学習しておきたい内容で平易にして適切な問いである」との評価をいただいた。うれしく思うとともに安堵している。

問9 「余りにも簡単で」リード文の趣旨を問う問題は「一定の難易度を保つべきだ」との指摘を受けた。趣旨が比較的シンプルであるリード文であるため、どうしても正答以外の選択肢が作りにくい。それでも、誤答の選択肢について、もう少し受験者に考えさせるような工夫の余地があったかと思われる。

第3問 難易度は全体として標準的であり、リード文については「外来の書物との出会いを通じて、それぞれの時代に生きた先人の足跡を描いたリード文であり、分かりやすく、よくまとまった内容となっている」との評価を得た。設問については、「古代、中世、近世、明治時代と幅広く、バランスが良い」と評されたが、「情報化が進んだ今日だからこそ、『書物との出会い』という意味がより重要性を増していることを考えると、腰を据え、じっくり書物を読み込むことの意義を、もう少しメッセージとして明確に出してほしい」との課題が示された。今後は、指摘を踏まえて洗練された出題を心掛けたい。

問1 「古代における仏教が、聖徳太子の『憲法十七条』に見られるように、統治理念として理解されていたことを学習していれば、解答は容易である」との評価を得たが、近世の儒教思想との違いを理解しているかを問うことを狙った設問であり、「基礎的基本的な問いながら教科書の記述のレベルは超えている」ためやや難しいとの評価もあった。

問2 平安期の最澄と空海の思想について、両者の違いを問う出題であったが、「キーワードを単純に覚えるだけでなく、その内容を正確に理解しておくことが求められ、教材として

も良問である」との評価であり、難易度は標準的とのことであった。

問3 鎌倉期の代表的な著書名を問う出題であったが、教科書に頻出する思想家の弟子が書いたものであり、「やや意表をつくような出題であったかもしれない」とも評されたが、選択肢のそれぞれが「代表的な著書であることを考えれば、妥当な出題」であり、標準的な難易度との評価を得た。

問4 近世の儒学者の思想を問う出題であるが、「雨森芳洲、新井白石が、近世儒学の学習の中で、決して主要部分ではないことを考えると、やや難解な設問であった」という評価を得た。しかし、外来思想や異文化との接触を問う上で、これらの思想家は今後取り上げてよいのではないかと考えられる。各思想家を識別する文言から正答は判別可能であり、「選択肢は日頃の『倫理』学習の指針となる」という評価もあった。

問5 伊藤仁斎の著作名を問うた問題であり、「思想家の著書名については学習を疎かにしがちかもしれないが、倫理の基本的な学習事項」であり、平易な設問であるという評価を得た。しかし、著書名だけでなく「思想家の内面を問う」出題が望ましいという指摘があり、今後の作問においてその点を留意していきたいと思う。

問6 荻生徂徠の思想と、学問の方法論に関する正確な知識と理解を問うた。やや難解ではあるが、「荻生徂徠の古文辞学、先王の道についての正確な知識・理解が求められる設問で良問である」、「ただ字面だけで暗記していたのでは到底解くことはできなく、良問」であるという評価を得た。「古学、陽明学、古義学をこの問を利用して整理すればよいことが分かり、学習の手掛かりとなった」との指摘は、出題意図を的確に捉えられ、非常にうれしく思う。

問7 福沢諭吉の思想を「通義（権利）」をキーワードに資料文を用いた設問であり、「資料読解力だけではなく、福沢思想についての知識・理解を前提とする出題となっており、総合力を試す資料問題として高く評価したい」、また著書から思想家の思想を問うことは「学問としてのあるべき姿」であるとの評価を得た。幕末維新期の思想家が西洋近代思想をどう受容したかを学ぶことは重要な点であり、その点を捉えての指摘は大変うれしい。難易度については、「総合的な応用力・判断力」を要することから、やや難解であるという評価であった。

問8 明治期を代表するキリスト教思想家についての設問であり、内村鑑三と新渡戸稲造に加え、余り取り上げられてこなかった新島襄も取り上げた。しかし、選択肢にそれぞれの思想家を特定できるキーワードがあることから、教科書をきちんと学習した受験者には、平易な内容であるという評価であった。

問9 リード文中の空欄を補充する設問であるが、リード文全体の趣旨を問うている。「日本人がいかに外来思想と向き合ってきたのか、時代を越えて通底する態度を再認識すること」ができ、「思考力と判断力を問う良問」との評価を得た。難易度としては、選択肢をよく読めば解答は容易だが、各文が長めであることと本文を丁寧に読む必要があることから、標準的であるという評価を得た。

第4問 多くの受験者は、法や制度が自由を制約する側面に注意を向けがちであり、社会において個人の自由を維持するためにはそれらが必要であるという事実に向き合う機会は少ないように思われる。「倫理を学ぶ受験者には、読んでしっかり考えてもらいたいリード文である」、

「『倫理』をよく学んできた高校生は、大学入試センター試験を受けているという現実を離れて思わずリード文を読み込んでしまったことだろう」との評価をいただき、自由であることの困難さについて受験者に考えさせるという出題意図はおおむね達成できたのではないかと考えている。

問1 平易な問題であるとの評価をいただいたが、マキャヴェリは出題頻度が低いので、出題する意義はあったと考えている。ただし、思想内容を問う方が望ましいという指摘はもっともだと思われる。

問2 平易であるという評価と標準的であるという評価の両方をいただいた。グロティウスについて出題したことで、自然権・自然法をめぐる思想に関する受験者の知識を広く問う問題になったと考えている。

問3 基本的知識を試す標準的な問題であるとの評価をいただいた。その一方で、「アダム・スミスの道徳論は触れていない教科書もある」との指摘があった。経済政策の文脈で取り上げられることの多いスミスだが、『道徳感情論』の内容こそ、倫理の教科書で詳細な解説があつてよいと思われる。

問4 標準的な難易度の問いであるとの評価をいただいた。様々な時代の思想家について問うた点に本問の意義があったものと理解している。

問5 平易な問題であるとの指摘があった一方で、「高校生が何を知ることが重要であるかを意識して作られた易問の方が取り組む意義があり、本問は良問である」との評価もいただいた。カントの道徳思想と永久平和の関係について問う意義が認められたことに満足している。

問6 ベルクソンのエラン＝ヴィタールの概念とスペンサーの社会進化論の概念については「学習が到達していなかった受験者もいただろう」、「スペンサーやコントは扱っていない教科書もあり問うべき思想家の選定が不適切」との指摘があった。指摘のとおりだが、スペンサーは進化論思想を社会や倫理の問題に適用した点で思想史上重要な意義を有しており、より多くの教科書で採用されることが望まれる。また、ベルクソンに関しては、教科書での記述が全般的にやや表面的かつ一面的であるように思われる。より踏み込んだ記述が加えられることを期待したい。

問7 選択肢に取り上げられた全ての思想家が独自の観点から自由の困難さについて論じており、その意味ではリード文の主題と直接関わる問題である。「『倫理』学習の視点からは、選択肢がそのまま『自由』をテーマとした現代思想の学習となる」との評価をいただき、出題意図が達成されたことに満足している。だが同時に、そうであればこそ、個々の選択肢を独立した問題として作成できたなら、全体としてよりリード文の趣旨に即した出題になっていたのではないかと考えられるので、今後の問題作成に活かしていきたい。

問8 「(サルトルの)実存主義の根本理解を問う適切な問いである」、「サルトルの思想についての知識と理解に加えて、資料の読解力が問われる良問」との評価をいただき、資料読解の形式で出題した意図が達成されたと考えている。

問9 「『自由』への自問の必要性を最後に問い直すことは意義のあることであり、『倫理』問題の掉尾^{ちょうび}を飾る外せない問いである」との評価をいただいたが、一方で「リード文を読まな

くても正解はできてしまう」、「(誤答選択肢が) 不自然なものとなっている」との指摘もあった。問題が平易すぎるとの指摘だが、誤答であることを明確にする必要もあり、バランスを取る難しさを改めて痛感した。

4 今後の作題にあたっての留意点

各方面からいただいた意見、指摘、評価などを参考にしながら、以下の諸点に留意して、今後の問題作成に努める。

- (1) これまで同様、分野別・時代別等においてバランスの取れた問題作成に努める。
- (2) 基本的知識を基にしながらも、変化する社会に対応できる理解力、思考力、応用力を問う問題作成に努める。
- (3) 評価の高いリード文に基づく設問は継承しつつも、さらにそれを洗練させるよう改善を重ね、リード文に密接に関連した、受験者に深く思考させる設問の作成に努める。